1993年（平成5年）11月　第9号

都島だより KANTO NANIWA KOGYOKAI NEWS 9

関東浪速工業会会報

発行責任者
太田　清
流山市名都借224-5
〒270-01　TEL 0471-46-0219

'93.11.10

投稿送り先
榎本嘉信（昭20土）
〒176 練馬区光が丘6-1-2-105
TEL (03)3976-6328

編集委員　電気＝笹本克己（S13卒）田中己晴（S43卒）・土木＝秋月勝美（S18卒）榎本嘉信（S20卒）・建築＝若林衛（S36卒）西口勝臣（S47卒）
工化＝松井駒治（S32卒）柴田孝次（S34卒）・機械＝福岡輝夫（S26卒）橋本健治（S28卒）・石川芳夫（S34卒）

関東浪速工業会の今昔を語る

―会を支えてきた人びと―

（昭12　電卒）上畑　清郎

8月のいつ頃だったか忘れたが、午前8時過ぎからのNHKテレビの「ニュースの言葉」でこんなことを話していた。さるドイツの大統領が「過去に目をつぶる者は現在も盲目である」と。私は名言だと思った。過去のことはすんだこと、だから消えてゆく、それよりもこれから先のことを考えよ、とは誰もが言うセリフである。しかし歴史は繰返すと言われているが過去を見つめ、これを記憶に残すことによって良い未来が拓けてゆく。私はそう思う。東洋人のうち特に漢民族や大和民族は過去を大切にし、過ぎ去ったことに限りなき愛着をもち、懐旧の情に浸ることに楽しさを求める。けれども団塊の世代やこれにつづく諸君はどうであろうか。いささか異論があろうと思う。

私は昭和の初期から関東浪速工業会を支えてきた人びととの交友は少なく、仲間に入れて頂いたのはここ十年来のことなので、首題について口はばったいことを言う資格はない。しかし石井一郎さん（昭16機卒）が自費で出版された都島工業の歩んできた歴史の記録「都の葦」の記述を読み、また戦後ずっと東京在住の先輩と親交のあった笹本克巳さん（昭13電卒）や島節雄さん（昭14電卒）から折にふれて昔の話を聞いているので本会の生いたちについてここに紹介して見ようと思う。

昔の先輩たちは骨のある甲斐性のある人が多く、頼りがいがあった。そういう人たちがリーダーになって浪速工業会が育てられてきた。全くよき時代であったとつくづく思う。ひるがえって今はどうであろうか。

一、浪速工業会東京支部

設立は昭和三年初春であったと明記されている。初代支部長は機械一回の原田涵一さん（明治45年卒で勿論故人）。皆さんよくご存知の柱本和一さん（大10機卒逝去）はその頃、若い元気な世話人として活躍されていた。

昭和四年の支部会には第二代目、杉田稔校長が上京され天皇陛下ご臨幸の報告をされている。以後毎年、会合が開かれ昭和10年頃には東京に限らず広く周辺地区の会員も加え関東支部の色彩が濃くなってきた。昭和14年には同年に退任され住居を東京に移された第三代目、小山幹也校長を迎え、歓迎会が催されている。このように当時の先輩たちは母校の校長先生を尊敬し師弟間の絆が強かったことがうかがえる。

二、浪速工業会関東支部

昭和14年11月に関東支部として発足し、会の規約が制完され河崎浄さん（大5機卒）が支部長に就任された。その頃の名簿を見ると総勢一〇〇名前後であったと記述されている。

以後終戦までは大した活動はなかったように思う。また戦後も食うや食わずの時代であったので同窓会どころではなく空白の時代がつづいている。

三、関東浪速工業会

昭和27年9月頃から有志が集まって関東支部の復興を準備し、昭和31年10月に関東浪速工業会として再発足、初代会長は重松武雄さん（大4化卒）であった。今も浦和市でご健在の由で、うれしいことです。私は昭和33年頃にどこだか忘れたが総会に出席した記憶があるがそれではない。当時の会員数は約百八十名で出席者は60名という盛会であった。あの頃は会長や幹事には錚々たる人が居られ二次会は銀座のバーとか新橋の料亭などへ連れてゆかれたものである。佐々木大二さん（昭6機卒）、中西正光さん（昭6建卒）などの先輩が目立った存在で暖かい声をかけて頂いたのでとても楽しかった。

たしか昭和45年には山本恵造（英夫）さん（大13年機卒）が会長になられ総会ではいつも氏独特の健康体操を披露された。足腰がとても軟かい方で人なつっこい笑顔で出席者の一人一人に声をかけられ心温まる会長であった。もう86才ぐらいにおなりになるが、どうしておられるだろうか。

その頃から科別の集りが活発になり機械科の関白会が昭和52年に、建築の青甍会が昭和54年に誕生している。これらの会は共に会員相互の結束が固く度々ローカルの会合がもたれ仕事の上での付合いが多かったと聞いている。

前述のように関東浪速工業会はスタートしてからずっと経済的には自主運営であった。本部からの補助はなく会員からのその時々の会費と有力メンバーからの寄付が財源であった。言わば独立採算制であり、関東は関東で運営し本部の世話にはならないというプライドをもっていた。

10年余りの間、名会長として努力された山本さんが昭和57年（？）に関西へ帰られることになり同氏につづく会長の人選難におち入り、今後は各科持ち廻りで会長を出し、任期一年ぐらいで引きついでゆくという案が浮上してきた。（つづく）

都内散策の楽しみ

（工化・32卒）佐々江延宜

小生が大阪から東京へ転勤となったのは、昭和六十一年三月、既に7年8カ月になります。

こゝ数年前から週休2日制になったこともあり年間一二〇日以上の休み（有休は別）をどうして過すかを考えるようになり、週末の土曜日を都内散策に当てることが多くなりました。

広い東京のため、まだわずかな部分しか知り得ませんが、大阪と比較すれば緑が多く、森林浴の出来る木立のある公園、庭園等がそこゝにあり、散策をしながらいろいろのことを知り、又、めずらしいものを見つけたり、美味しいものにありついたりで、大いに英気を養っています。お金をあまり使わずに、都営の一日乗車券（六五〇圓で一日乗り放題）を活用したり、健康のために歩いたりで都内散策万才と云ったところです。

ところで最近一年位の間に廻った先で、皆さんにおすすめしたい所として、今回は庭園に絞り紹介しますと、小石川後楽園（水戸藩上屋敷跡・東京ドーム隣接）都立六義園（柳沢吉保設計・JR駒込駅徒歩約8分）、都立清澄庭園（紀伊国屋文左衛門別邸・地下鉄東西線門前仲町駅徒歩約10分）の三カ所が非常に印象に残り良いと思います。

四季折々の花があり、池には鯉が泳ぎ、浮島にはいろいろな鳥が来てどこもすばらしい光景です。入場料はどこも百～二百圓位で非常に手軽です。一度是非おたずね下さい。まだ名勝と云われている旧古河庭園や旧安田庭園等行ってないところも沢山あり、出来るでけ機会をつくって行きたいと思っています。

お手軽ですので関東浪速工業会の行事としても取上げられたら如何でしょうか。又、隠れた散策場所を是非教えて下さい。

土屋先生を偲ぶ

（E36）馬江　治喜

平成5年8月10日、恩師「土屋先生」が亡くなられました。享年70才との事で若くしてお亡くなりになられた事を大変残念に思います。土屋先生はMニュース7号（平成4年10月発行）に特別寄稿として原稿を載せておられるので詳しくはその原稿を見ていただければ良いと思います。

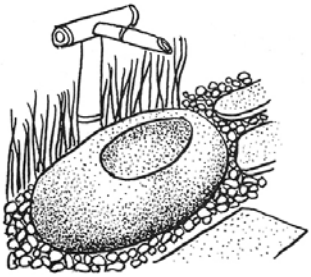
私は昭和33年～36年迄3年間担任していただき電気理論、送配電等を教えていただき、又原子力研究クラブをも担当していただきました。特に原研クラブに於いては当時始まったばかりの茨城県東海村の原子炉1号の見学につれて行っていただき又東京の理科学研究所にて核融合の実験装置の見学につれて行って下さいました。又六甲山へ飯盒すいさんをした事等が在学中の思い出としてついこの前の事の様に思い出します。又卒業后も私は2回も就職の相談にのっていただき他の同級生より多く御世話になった事と思います。

又先生の御指導により在学中に電検三種をとる事が出来て現在この資格が大変に役に立っている事が本当にありがたく思っています。私の人生にとって本当に大きな影響を与えていただいた土屋先生がこんなに早くお亡くなりになるとは残念でたまり

ません。

ただ昨年（平成4年）の3月20日頃に在京の同級生石垣君、竹村君の三人で土屋先生を新幹線ひかりの2階車輛のグリーン車にて横浜鎌倉迄御招待いたし鎌倉にて一泊して一杯飯みながら各自の今迄の出来事及近況を先生に報告し先生より都工の新校舎の写真をいただき、内容を御説明していただいたり先生の近況をお聞きしたりして大変楽しい一晩を過ごしました。翌日タクシー貸切にて鎌倉市内を見学いたしました。この様な事をさせていただき先生に対して御恩返しのまねごとの様な事をもっとさせていただきたかったのですが、これが最初で最後になってしまいました。本当に残念でたまりませが、土屋先生の御冥福を心よりお祈り申し上げます。

合掌



たかが俳句・されど俳句(1)

中野大八郎

私の指導している教室の女性からの手紙である。「…主人を亡くして2年、することもなく息子夫婦にも何か気兼ねの日々でしたが、誘われて俳句を始め、毎月、先生のお話を聞いている内、俳句を作る楽しさ、名句の素晴らしさに月1回の句会が待ち遠しくてなりません。嫁もこの頃のお姑さんは輝いていると言って呉れます。若い時からやって置けば、もっと素敵な人生が送れたのにと、悔やまれます。…後略」。このような講師冥利に尽きる内容である。それから5年を経過して、今では中堅作家に成長し、時々、私と俳論を交わすまでになった。

俳句が上手になる特効薬などある訳がなく、つまるところ、天分×努力、がその人の作品となる。俳句に対する天分は、個人差はあって日本人であれば零ではない。要は地道な努力次第ということであろう。

易しく、楽しく俳句作りの話を書いて欲しいとの、編集者よりの難しい注文なので、カリキュラムに、無い知恵を絞っている。次回からは具体的な実作のポイントについて、私なりの考えを述べてみたい。

私が俳句をやって良かったと思うのは、自然に足して丁寧な人生を送ることが出来たことと、俳句によって生れた人との出会い（俳縁）の素晴らしさである。

秋

懐石のほどよきころの子持鮎
こきざみに目覚めてばかり霧の宿
稲架襖車内禁煙解けるころ
外海は秋を知らせる波がしら
三尺の流れ砦に通草の実

「上方落語」

（建築科47年卒）西口　勝巨

都工出身の落語家に、工業化学科45年卒の笑福亭松葉さん（本名・倉本雅生氏）と建築科59年卒の桂米左さん（本名・木村佳氏）の2名がおられます。ともに現在大阪で活躍中ですが、昨年の暮れに相次いで東京で公演されました。その時は残念ながら聞きに行くことができませんでしたが、9月に桂米左氏から東京公演のご案内をいただき、建築科先輩の酒井さんと一緒に言ってきました。

久々の上方落語でした。久々に腹の底から笑えた2時間半。大阪弁の落語、あの何とも言えないこてこての笑い。関西人にはやはり上方落語が馴染なのでしょうか。上方落語のとりこになってしまいそうです。

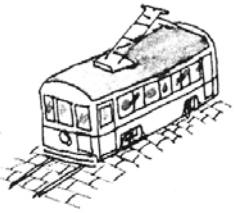
今回の公演も、案内をいただいたのが、直前だったものですから、ごく一部の人にしかご連絡ができなくて、申訳なく思っております。このMニュースも年2回の不定期発行のため、なかなか皆様へのご案内が間に合わないと思います。上方落語ファンの方、興味有と言われる方、同じ都工生を応援して下さる方、私の方へハガキ又は手紙でご連絡いただければ、両落語家の関東公演時に案内が届くよう、窓口（同窓会幹事の一員）としてできる限り努力致しますので、面倒とは思いますが、面白い上方落語のため、同窓生のためにも一度お便りいただければと思います。

なお末筆ながら、上方落語との再会の機会を作っていただきました先輩の皆田一彦（A科16年卒）・金田龍之介様（M科21年卒）並びに両落語家氏には、紙面を借りまして心より御礼申し上げます。

夏柳

（M18）小川　玉泉

納涼のバス寿司初を皮切りに
吉原の大門跡と夏柳
おいらんのショーの松葉屋水打たれ
花魁の香を肩先に月涼し
濠端を埋め初秋の車の灯



ビール工場見学会

（E13年卒）笹本　記

7月3日、今年の見学会として企画した横浜市生麦のキリンビール生麦工場を訪ねました。

参加者25名、最新設備を誇る工場をガイド嬢の案内で5千年の歴史をさかのぼった博物館をスタート、第1工程の仕込み、発酵、貯蔵、仕上げ、ろ過と順に廻り途中、発酵を終えてできた若ビールのろ過前の試飲もあり、最後の製品工場では瓶列1分間に600本、缶列1分間に1500本と物凄い速さで詰められる設備には感心しました。

また至る処でコンピュータ管理が行われ倉庫の出し入れ迄無人フォークや自動搬送ロボットが活用されて広大な工場に人の数の少いのに驚きました。

20年位前だったか、やはり浪速工業会で見学会がありましたがその頃とは雲泥の差でした。

見学終了後、例によってビールの接待を受けましたが此の方は紙コップに一杯だけで、構内にモダンなビヤホール（有料）が設けてあり、昔は瓶ビールを次から次と幾らでも出してくれたのに、やはり時代だナァ（ミミッチィ？）と談笑し乍ら駅へ向った次第でした。

"夜のお江戸観光"

（C20年）榎本　嘉信

8月28日（土）に関東浪速工業会として、「夜のお江戸観光」を行いましたことを御報告いたします。

当日の出席者は19名でいささか少ない参加でしたが、会食後、寄席見物、吉原「松葉屋」での歌謡ショーやおいらんショーなど、楽しい一夜を過しました。

たまには、肩の張らない催しも良いものです。今後、当会として、もっと参加者が多くなるような企画が必要かと思います。良い企画がございましたら、幹事まで、奮って御連絡下さい。

おことわり

紙面の都合上、上畑様（電気12年）の御寄稿は全文掲載できませんのでしたので、次号のMニュースに後半を載せることにいたしましたこと御了承お願いします。